

編集後記

本月号の特集はリハビリテーション領域における体力である。これに関しては、今後に残された重要な課題として、多くの識者により指摘され、その研究も着実に発展しつつあることは喜ばしい限りである。

しかし、体力といっても、漠然としていて、体力とは何かという疑問があるという声も聞かれる。その解説を澤田教授にお願いした。分り易く、全般的に論じて頂き、厚く御礼申し上げる。宮原氏にはリハビリテーション領域で最も多い対象となっている片麻痺に関してのものを、木村教授には関節リウマチについて論じて頂いた。整形外科領域でのこの方面の研究はほとんどない。その他の研究内容も、多岐にわたるが、その主流が関節の障害など局所に偏った傾向があるようだが、視野の広い全人間的な観点から検討を加えられたもので興味深く読ませて頂いた。松家氏からは、筋ジストロフィーに関しての永年にわたる臨床経験、研究成果の蓄積より論じられた力作を頂いた。しかし、社会復帰している各種の障害者の体力についても企画したが適当な執筆者がみつからず残念ながら断念せざるをえなかった。後日、本誌でも、これに

関連した事項について、とり上げたいテーマの一つである。いずれにせよ、体力という問題はリハビリテーション医学領域でも、科学性をさらにつけ、臨床に活用さるべきものであると考えられる。

その他の研究と報告、講座なども興味あるものが並び、質の高いものが多い。特に長島氏の論文は、リハビリテーション医学の基本的な診断学に関してのものであり、この方面の研究の発展も期待したい分野である。

最後になったが、読者の皆様と共に喜びを分かち合いたいのは、ひとの欄に紹介されている東京大学の上田敏先生の教授昇任である。これは分院、研究所を除く、国立大学でのリハビリテーション専任教授の初の誕生である。これはわが国のリハビリテーション医学の発展にとって、歴史に残る意義ある大きなエポックである。上田教授の今日までの超人的な活躍はご存知の通りであるが、今後、リハビリテーション医学の正しい発展のため、牽引車的なご尽力をお願いすると共に、ご活躍をお祈りしたい。

心から教授ご就任をお喜び申し上げる。

(緒方 甫)

次号予告(第12巻 第12号)

特集 末梢神経損傷とリハビリテーション

末梢神経損傷修復後の知覚の Central adaptability

について：小児グループと成人グループとの比較

より……………青森県立中央病院・整形外科 川 嶋 順 蔵

末梢神経損傷修復後の神経再生時における

神経伝導速度：軸索内の流れの

変化と運動機能……………川崎医大・整形外科 山 野 慶 樹

末梢神経損傷修復と筋の組織学的変化……………慈恵医大 米 本 恭 三

神経移植後の運動機能変換……………産業医大・整形外科 伊地知 正 光

末梢神経損傷と機能訓練……………慶大 本 田 哲 三・他

神経損傷後の骨格筋に対する低周波電気刺激

の影響……………広大・整形外科 畑 野 栄 治・他

巻頭言 リハビリテーション医療と健康保険：

cure の点数から care の点数へ……………都立北療育園 廿 楽 重 信

研究と報告 木製ソケット(大腿義足)の経験……………九州労災病院 吉 村 理・他

講座 合併症の障害学(6)脳障害児の合併症…子ども医療センター 林 美 智 子

言語障害の評価(6)実験的アプローチ…都・老研言語聴覚研 伊 藤 元 信

一頁講座 人工関節 (12) 人工関節の禁忌と適応上の

注意……………国立名古屋病院・整形外科 長 屋 郁 郎

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秋
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)